幸田露伴「観画談」素描

池田一彦

幸田露伴の『観画談』（大正十四年七月『改造』が初出、のちに『龍姿蛇姿』昭和二年一月に収む）は、「大器晩成先生」と渾名された人物が、大学在学中に「不明の病気」に襲われ、保養のために訪れた奥州のある山寺にて雨中不思議の体験をし、病いは癒えたが再び学窓に戻ることはなかった、という話、否「談（はなし）」である。

ずつと前の事であるが、或人から気味合の妙な談を聞いたことがある。そして其話を今だに忘れてゐないが、人名や地名は今は既に林間の焚火の煙のやうに、何処か知らぬところに逸し去つてゐる。

単行本『龍姿蛇姿』の「序文」（大正十五年十二月の執筆にかかる）に「観画談」の概略として、

観画談は全く幻境から取出し来つたものである。世おのづから是の如きの情、是の如きの人もあるべしとして描いたものである。世に真に是の如きの人、是の如きの事が存して、而して後に記したものでは無い。

とあり、「談」の全てが「全く幻境から取出し来つたもの」すなわち全きフィクションだと断わってあるので、その書き出しも、「ずつと前の事」「或人から」「人名や地名は（略）何処か知らぬところに逸し去つてゐる」とすべて朧げに仕立てられている。右の引用文にすぐ、「話を仕て呉れた人の友達に某甲といふ男があつた」云々と続くので、

「某甲」（すなわち後の「大器晩成先生」）の「話」を「友達」（すなわち先の「或人」）が聞き、それを冒頭の語り手が聞いて記した、という体裁になっていることが分る。「気味合の妙な談」という言い回しだけでも、どこか持って回ったような、朧ろな感じが十分伝わってくるのに、それがもともと話し手本人の「話」の又聞きということで、一層、この「談」の朧ろ気で怪し気な雰囲気がこの冒頭の数行で効果的に描き出されていると言うことができる。

「某甲」のプロフィールが続いて語られるのだが、彼は「極めて普通人型の出来の好い方」で、「晩学では有つたが大学も二年生まで漕ぎ付けた」男である。「晩学」であったのは、その男が「最初甚だしい貧家に生れた」ので「思ふやうに師を得て学に就くといふ訳には出来なかつた」ゆえで、「田舎の小学」から「自活生活」「小学の教師の手伝」「村役場の小役人みたやうなこと」等々、「いろ〳〵困苦勤勉の雛型其物の如き月日を送りながらに、自分の勉強をすること幾年であつた結果、学問も段々進んで来るし、人にも段々認められて来た」ので、「終に上京して、やはり立志篇的の苦辛の日を重ねつつ、大学にも入ることを得るに至つた」経緯があったのである。「蟻が塔を造るやうな遅々たる行動」を「生真面目」にとってきた挙句、「浮世の応酬に疲れた皺をもう額に畳んで、心の中にも他の学生にはまだ出来て居らぬ細かい襞積が出来て」いた。学費は「恐ろしい倹約と勤勉」とで作り上げていた真に模範的な学生であった。「真の学生」らしく「実に清浄純粋な、いぢらしい愉悦と矜持」とを抱いて「碩学の講義」「豊富な図書館」に身を浸し、「雑事に浸されない朝夕の時間の中に身を置いて十分に勉強することの出来るのを何よりも嬉しいことに思ひながら、所謂『勉学の佳趣』に浸り得ることを満足に感じ」（傍点筆者、以下同じ）ていたのである。

ところで、「勉学の佳趣」と言えば、一見何か無償のもの、無償な学問の歓びといったものを連想させられるが、果たして、何かのためでない無償の学問、純粋な学問のための学問というものはあり得るのだろうか。理念的には有って不思議でない気がするが、ここでの「大器晩成先生」の「学問」が当初本人の意識上においてそういうものであったとして、それが「大学」とか「学歴」といった制度的なものに絡め取られて行った時、「学問」に何やら歪みのようなものは生じて来ないであろうか。時代的に明治の中頃に設定されている「大器晩成先生」の場合、明らかにま

だ明治初年の福沢的実学思想の濃厚な影響下にあると見るのが自然であり（「立志篇的の苦辛」云々で言えば中村正直の啓蒙下にあることももちろんである）、だとすれば、「勉学の佳趣」は遂に「勉学の佳趣」のまま無償のものとしてはありえず、「立身出世」のための一手段としての「学問」という様相を呈して来るのが至極当然の成り行きというものであろう。「大器晩成先生」の味わった「勉学の佳趣」は、その先に「貧家」の「田舎」出身者であることをやがて覆そう、覆したいという隠された欲望＝動機をもまた持っていたであろうことは注意されていい。結論を先取りして言ってしまえば、「観画談」は、そうした「学問」に疲れた男が、山中での特殊な体験を通じてそうした「学問」的価値観のみが人間唯一の道でないことを悟り、新たな価値観に自らの生きるべき道を見出す、「棄学」の物語なのである。立身出世のイデオロギーに染め上げられた「学問」を中心とした一元的価値観が根底から揺るがされ、その「学問」を棄てても別の生きるべき道のあることを悟らされる、それが雨中山寺での体験の意味であり、最終部の「観画」体験の意味であったのだ。

「大器晩成先生」は、在学中突然「不明の病気」に襲われる。

ところが晩成先生は、多年の勤苦が酬ひられて前途の平垣光明が望見せらるゝやうになつた気の弛みの為か、或は少し度の過ぎた勉学の為か、何か知らぬが気の毒にも不明の病気に襲はれた。其頃は世間に神経衰弱といふ病名が甫めて知られ出した時分であつたのだが、真に所謂神経衰弱であつたか、或は真に慢性胃病であつたか、兎に角医博士達の診断も濛朧で、人によつて異る不明の病に襲はれて、段々衰弱した。切詰めた予算だけしか有して居らぬことであるから、当人は人一倍困悶したが、何様にも病気には勝てぬことであるから、暫く学事を抛擲して、心身の保養に力めるが宜いとの勧告に従つて、そこで山水清閑の地に活気の充ちた天地の瀕気を吸ふべく東京の塵埃を背後にした。

分かっていることは、「東京の塵埃」中の「勤苦」「勉学」の過度であったがための「不明の病気」に襲われた、ということだ。「神経衰弱」と決まったわけではない、飽くまで「不明」の病いである。而して、「大器晩成先生」

は、この後、奥州の山中にて種々の「不明」に遭遇することとなるのである。「取止めの無い漫遊の旅」に「極真面目な男」である「大器晩成先生」は、「俳句」も「小説稗史」も「徒然草」も、多く虚に出ずるものは断然、これを排して、唯一「漢詩」を旅中の楽しみとして携え歩く。同じ虚学の文芸でも、最も実に近い硬派の文芸をこそ嗜まんとする、いかにも「極真面目な男」にふさわしい設定である。

さて、「ぶらり〳〵とした身の中に、もだ〳〵する心を抱き」つつ、「大器晩成先生」は、旅中知り合いになった「遊歴者」の勧めで、奥州の僻村の山寺へとその滝の水を求めて旅を続ける。「君の病気は東京の名医達が遊んでゐたら治るといひ、君もまた遊び気分で、飛んでも無い田舎などをノソ〳〵と歩いてゐる位だたら、とてもの事に其処へ遊んで見たまへ」という訳だ。「遊び」が病気の処方箋たり得るということ、謹厳実直を絵に描いたような「大器晩成先生」に最も欠けていたものが「遊び」だったということ、「遊び」はいわば「立身出世」のための「学問」の対極に位置する、本来無目的的な精神的営為だということをここで確認しておきたい。「遊び」への意志は、ひとつの有効な「学問」相対化の方法たり得るのだ。そして「大器晩成先生」は、この時点でまだ明確にそのことを意識化してはいない。

山中を行く「大器晩成先生」は、険しい山路を「是非なくも蟻の如く蟹の如くになりながら」若干「後悔する気味」にもなり「明るく無い心持の沈黙」を続けて、歩き続ける。「頭の上から名を知らぬ禽が意味の分らぬ歌を投げ落」したのもこの途上だ。やがて、路が緩やかになっても豆畠の豆が「シヨボ〳〵と泣きさうな姿」をしていたり、茅屋が「物悲しく」見えたりするが、どれも「大器晩成先生」の心象の現れだろう。そして「雨」が来る。農家の婆さんに教えを乞うて、ようやく寺に辿り着く。婆さんは、「火を付けたら心よく燃えさうに乱れ立つたモヤ〳〵頭な婆さん」とも、「皺だらけの黄色い顔の婆さん」とも、「木彫りのやうな顔をして」とも叙述されるが、どうも人界を既に離れたかの如き趣きを伴っている。「門前村」は、異界への入口然としてそこにある。

雨中に現前した寺は、「可なり其昔の立派さが偲ばれると同時に今の甲斐無さが明らかに現はれてゐ」て、後に洪水の際の流木に破壊されたと語り聞かされる仏殿の跡など

が、却って降りしきる雨に偲ばれた。庫裡へと入った直後の描写は次のようである。

正面はぴつたりと大きな雨戸が鎖されてゐたから、台所口のやうな処が明いてゐたまゝ入ると、馬鹿にだゞ濶い土間で、土間の向ふ隅には大きな土竈が見え、つい入口近くには土だらけの腐つたやうな草履が二足ばかり、古い下駄が二三足、特に歯の下駄の一ツがひつくり返つて腹を出して死んだやうにころがつてゐたのが晩成先生のわびしい思を誘つた。

頼む、

と、余り大きくは無い声で云つたのだが、がらんとした広土間に響いた。しかし其為に塵一つ動きもせず、何の音も無く静であつた。外にはサアツと雨が降つてゐる。

頼む、

と再び呼んだ。声は響いた。答は無い。サアツと雨は降つてゐる。

頼む、

と三たび呼んだ。声は呼んだ其人の耳へ反つて響いた。然し答は何処からも起らなかつた。外はたゞサアツと雨が降つてゐる。

頼む。

また呼んだ。例の如くやゝしばし音沙汰が無かつた。少し焦れ気味になつて、また呼ばうとした時、鼬か大鼠かが何処かで動いたやうな音がした。すると頓て人の気はひがして、左方の上り段の上に閉ぢられてゐた間延びのした大きな障子が、がた〳〵と開かれて、鼠木綿が斑汚（ムラヨゴ）れした着付に、白が鼠になつた帯をぐる〳〵と所謂坊主巻に巻いた、五分刈では無い五分生えに生えた頭の十八か九の書生のやうな僮僕のやうな若僧が出て来た。晩成先生も大分遊歴に慣れて来たので、此処で宿泊謝絶などを食はせられては堪らぬと思ふので、ずん〳〵と来意を要領よく話をして、白紙に包んだ多少銭（ナニガシ）かを押付けるやうに渡して仕舞つた。若僧はそれでも坊主らしく

しばらく

と、しかつめらしく挨拶を保留して置いて奥へ入つた。奥は大分深いかして何の音も聞えて来ぬ、シーンとしてゐる。外では雨がサアツと降つてゐる。

『観画談』全体の、約三分の一程度の箇所に位置する右

の場面、「全く幻境から取出し来つたもの」としても、数ある近代文学作品中、最高の部類に属する筆の冴えを示している。「観画談」が、結末部「観画」体験の語られる以前、過剰なまでに「音」「声」にまつわる描写、叙述の多いことは一読明らかだが、種々の「音」的状況の中で、一字下げで改行後、四たび畳みかけられる「頼む」の妙、読む者をして現場に直ちにあらしむるの力を有するものと言えよう。読点から句点へのさりげない移行も含めて、聴覚的にも視覚的にも「頼む」は読み手の心に響いて余す所が無い。そして、それに輪をかけて四たび繰り返される、外の雨降る情景を摸した筆づかい。「外にはサアツと雨が降つてゐる」→「サアツと雨は降つてゐる」→「外はたゞサアツと雨が降つてゐる」→「外では雨がサアツと降つてゐる」。微妙に書き換えられて行く様がいかにも自然で、且つ読み手の心中に確かにひとつの揺るがぬ情景のイメージを定着させる。全体「音」に包み込まれた中で、しかし、「サアツ」は雨の音ではない。外に雨の降る、全体の情景を形容する擬態語だ。しかも、周囲の「音」とも鋭く対立することなく、見事にこの場面全体を包み込んでいるといった按配。読み手の心中、確かに「雨」は「サアツ」と降り続いているのである。

畢竟するに、「観画談」の妙は、その文体の妙に存するのだろう。「観画談」は、その論者によってさまざまな論点を提供するだろうが、その文体の素晴しさへの着眼を抜きにした論は、やはりどこか空しいと思う。この文体は、まことに異世界体験による現世での人の心の生れ変わり、再生――前述の言葉を用いれば「棄学」の物語ということにもなるが――という主題にふさわしいものというべく、両者一体となって読み手の心を根底から揺り動かす物語を形成していると言えるのだ。中には「五分刈では無い五分生えに生えた頭」のような、一見冗長で諧謔めかした表現も随所に見られるが、どれもこの作品全体の、悠揚としてせまらぬ雰囲気に見事に照応していると言うべきだろう。

さて、その後、寺の和尚との対面も無事すまして、寺での宿泊を許された「大器晩成先生」は、「空虚に近い」心を抱きつつも、「雨の音」ばかりでない、「滝」をも含めた「ザアツといふ音」を聞きつつ、夜の食事を和尚、蔵海(先の若僧)と共にする。その後、あてがわれた部屋へ戻って、不思議な気分を味わうことになるのである。

大器氏は定められた室へ引取つた。堅い綿の夜具は与へられた。所在無さの身を直に其中に横たへて、枕許の洋燈の心を小さくして寝たが、何と無く寝つき兼ねた。茶の間の広いところに薄暗い洋燈、何だか銘々の影法師が顧視らるゝやうな心地のする寂しい室内で寒素な食事を黙々として雨音の聞えるや中で取つた光景が眼に浮んで来て、自分が何だか今迄の自分で無い。別の世界の別の自分になつたやうな気がして、まさかに死んで別の天地に入つたのだとは思は無いが、何様も今までに覚えぬ妙な気がした。然し、何の、下らないと思ひ返して眠らうとしたけれども、やはり眠に落ちない。雨は恐ろしく降つて居る。恰も大古から尽未来際まで大きな河の流が流れ通してゐるやうに、雨は降り通して居て、自分の生涯の中の或日に雨が降つて居るのでは無くて、常住不断の雨が降り通して居る中に自分の短い生涯が一寸挿まれて居るものでゞもあるやうに降って居る。で、それが又気になつて睡れぬ。鼠が騒いで呉れたり狗が吠えて呉れたりでもしたならば嬉しからうと思ふほど、他には何の音も無い。住持も若僧も居ないやうに静かだ。イヤ全く吾が五官の領する世界には居無いのだ。世界といふ者は広大なものだと日頃は思つて居たが、今は何様だ、世界はたゞ是れ

ザアッ

といふものに過ぎないと思つたり、又思ひ反して、此のザアッといふが即ち是れ世界なのだナと思つたりしてゐる中に、自分の生れた時に初めて挙げたオギヤァ〳〵の声も他人の囚地云つた一声も、それから自分が書を読んだり、他の童子が書を読んだり、唱歌をしたり、嬉しがつて笑つたり、怒つて怒鳴つたり、キヤア〳〵ガン〳〵ブン〳〵グヅ〳〵シク〳〵、いろ〳〵な事をして騒ぎ廻つたりした一切の音声も、それから馬が鳴き牛が吼え、車ががたつき、汽車が轟き、汽船が浪を蹴開く一切の音声も、板の間へ一本の針が落ちた幽かな音も、皆残らず一緒になつて彼のザアッといふ音の中に入つて居るのだナ、といふやうな気がしたりして、シテ静かに諦聴すると分明に其の一ツのザアッといふ音にいろ〳〵の其等の音が確実に存して居ることを認めて、ア、然様だつたかナ、なんぞと思ふ中に、何時か知らずザアッといふ音も聞え無くなり、聞

く者も性が抜けて、そして眠に落ちた。

「寺」という、日常的感覚や価値基準とは一線を画する特別の場で、「自分が何だか今迄の自分で無い。[ママ]別の世界の別の自分になつたやうな気」に「大器晩成先生」は囚われる。まだ、寺に厄介になって程もない、その夜にである。外は雨に鎖された寺の一室で、既に「大器晩成先生」の日常的感覚は揺さぶられ始めている。「今までに覚えぬ妙な気」は、しかし、すぐと「何の、下らないと思ひ返」され、否定されようとする。いわば「大器晩成先生」の今日までに培った「学問的教養」が――それは、別に「学問的知性」と呼んでも「学問的理性」と呼んでもよいが――自らの範疇に無い「不明」のものを排除しようとした図だが、ことはそう簡単に運ばない。不眠の中に、「雨」を通してさらなる不思議の観念に囚われて行くのである。「自分の生涯の中の或日に雨が降つて居るのでは無くて、常住不断の雨が降り通して居る中に自分の短い生涯が一寸挿まれて居る」という観念。近代的な人間中心主義を根底から覆すような、「雨」が「常住不断」で人たる「自分」が挿入さるべき「短い生涯」と観念される、一般的日常的感覚からすれば「主」と「客」の転倒した世界。いわゆる「学問的常識」とは対極の世界が脳裡に現出するのである。「世界といふ者は広大なものだ」というのが「日頃」の思いなら、今や「大器晩成先生」の思念は全く転倒して「世界はたゞ是れ／ザアッ／といふものに過ぎない」と思いもし、「此のザアッといふが即ち是れ世界なのだナ」と思い返したりもする、という状態。自分の個人史も一国の文明史も、果ては一針の落ちる音までも、すべて「一つのザアッといふ音」という一極点に包含せられてあるという思念は、おそらく今日の今日まで「大器晩成先生」の脳中に一切存在すべくもなかったものだ。「皆残らず一緒になつて」とは、「平等」ひいては「一切無差別」の感覚も程近い。それらこき混ぜて、既成の価値観の転倒、未知の世界の予感を奇しくも山寺の一夜、「大器晩成先生」は心的に体験してしまったのだ。しかも、それは「何時か知らずザアッといふ音も聞え無く」なって、「性が抜けて」眠りに落ちる寸前の、限り無く「大器晩成先生」自身の無意識に近い領分での出来事だったのである。

「俄然として睡眠は破られた」。洋燈や提灯をともして和尚と若僧が枕元にいる状況に、「大器晩成先生」もはじめは「その意味は分ら」ず「けゞんな気持」がするが、やが

て「奥山の出水」を心配して、小山の上の「隠居所の草庵」への避難を促すためのことと知られて、「大器晩成先生」は若僧の案内に導かれて雨中、真暗の外へと連れ出される。「何だか物凄い不明の音」に脅されつつ、「夜雨の威がひし〳〵と身に浸みる」中、いつしか提灯の火も消えて「たゞもう天地はザーツと、黒漆のやうに黒い闇の中に音を立てゝ居るばかり」、一本の「蝙蝠傘」のみを頼りに二人は闇の中を行く。

平常は一ト通りの意地が無くもない晩成先生も、こゝに至つて多力宗になつて仕舞つて、たゞもう世界に力とするものは蝙蝠傘一本、其の蝙蝠傘の此方は自分が握つてゐるが、彼方は真の親切者が握つてゐるのだか、狐狸が握つて居るのだか、妖怪変化、悪魔の類が握つてゐるのだか、何だか、サツパリ分らない黒闇々の中を、兎に角後生大事にそれに縋つて随つて歩いた。

「闇」である。視覚の働く昼間ならいざ知らず、あらゆる日常的判断を拒否された世界。理知的に判断してどうなるというものでもない「不明」の世界へと、より一層「大器晩成先生」は踏み込まされてゆく。

かうなると人間に眼の有つたのは全く余り有り難くありませんね、盲目の方が余程重宝です、アツハ、ハ、。わたくしも大分小さな樹の枝で擦剝き疵をこしらへましたよ。アツハ、ハ、

ト蔵海め、流石に仏の飯で三度の埒を開けて来た奴だけに、大禅師らしいことを云つたが、晩成先生はただもうビクビクワナ〳〵で、批評の余地などは、余程喉元過ぎて怖いことが糞になつた時分までは有り得はし無かつた。

人間の理知的営為としての「批評」も何もない状況、急な坂路を「胸を突くやうな感じ」を抱きつつ、「一歩一歩に地面を探るやうにして、まるで四足獣が三足で歩くやうな体になつて歩」く「大器晩成先生」の所作自体が既に「人間」を放棄したものの如くである。目的地に着いて、蔵海が蝙蝠傘の一端を放せば、「大器晩成先生」は「全く不知案内の孤立者」となり、「黙然として石の地蔵のやうに身じろぎもしないで雨に打たれながらポカンと立」つばかり、「次の脉搏次の脉搏を数へるが如き心持になりつゝ、次の脉が搏つ時に展開し来る事情をば全くアテも無く待」つしかないのであつた。雨中、闇の中を行くという、確か

に特殊な体験ではあるに違いないが、ここに来てさすがに「立志篇的」の「晩学」の徒も、全く為す術を知らぬかのようであったのである。「大器晩成先生」の修めた「学問」的なるもの、近代の人間中心主義も合理主義も、一切を無効化するものとしての「雨」中「闇」の体験、そう言えばまた、近代は聴覚よりも視覚重視の時代であった。「大器晩成先生」を取り囲んでゆく種々の状況は、繰り返すが、正しくそうしたものたちの対極、反措定として次から次と立ち現れてくるのであった。

山寺の「隠居所の草庵」の部屋にいたのは、「厚い座蒲団を敷いて死せるが如く枯座して居た老僧」で、そのさまは「着色の塑像の如くで、生きて居るものとも思へぬ位」であった。生死の境界を超越したかのようなこの老僧は「細い眼」は開いても、「一語をも発しない」風であったが、「大器晩成先生」はこれに驚かされつつも老僧の威厳に「何か知らず叮嚀に叩頭(オジギ)をさせられて仕舞」う。自分の意志とは無関係に自ずと行動の生ずる「不明」の境界を味わわされるのである。

大器氏は実に稀有な思がした。此の老僧は起きて居たのか、眠つて居たのか、夜中真黒な中に坐禅といふことをして居たのか、坐りながら眠つて居たのか、眠りながら坐つて居たのか、今夜だけ偶然に此様いふ態であつたのか、始終斯様なのか、と怪み惑うた。もとより真の已達の境界には死生の間にすら関所が無くなつてゐる、まして覚めて居るといふことも睡つてゐるといふことも無い、坐つて居るといふこと、起きて居るといふこと、は一枚になつてゐるので、比丘たる者は決して無記の睡に落ちるべきでは無いこと、仏説離睡経に説いてある通りだといふことも知つて居なかつた。又いくらも近い頃の人にも死の時のほかには脇を下に着け身を横たへて臥さぬ人の有ることをも知らなかつたのだらう、吃驚したのは無理でも無かつた。

蔵海帰って後、「大器晩成先生」の「稀有な思」は、ひとえに通常の判断を安易に容さぬ、いわば判断停止の宙ぶらりんの状態に心底引き込まれたことに由来する。AかBか、一元的に片方を選択することが容されない、ただAかBか決定不能のまま放り出されたかのような全き「不明」の世界。怪し気な、判断停止、または事物の境界線の融解して明確な輪郭の失われていくかの状態。そこでは、明確

な線で種々の物・事を切り分けて行く近代的知性は無効となるしかない、あたかもそうした状態に「大器晩成先生」は追い込まれ、投げ込まれたのである。しかも、「老僧は晩成先生が何を思つて居やうとも一切無関心」である。「大器晩成先生」がここで際会したのは、正しくそうした老僧による「真の已達の境界」であったのだ。

奥で休むように、との老僧の言葉に、またしても「大器氏は自然に叩頭をさせられて其言葉通りになるよりほかは無」く、奥へと進む。そこで「大器晩成先生」は「初めて安堵して我に返つたやうな気」がし、寒さに胴顫し、「そして何だかがつかり」する。落ち着いてからは「□□さんと自分の苗字を云はれたのが甚く気にな」るのだが、「然しそれは蔵海が指頭で談り聞かせたからであらうと解釈して、先づ解釈は済ませて仕舞」う。「我に返つたやうな気」は、先の異様な体験からどうやら少し平常の自分を取り戻したからのことであろうし、「がつかり」したのは、そうした体験を経て「大器晩成先生」が何らか緊張のほどけたのを感じたからであろう。耳の聞こえぬ筈の老僧が自分の名前を呼んだ不思議も、一応の「解釈」で済ませることは出来た。理性的な自分にどうにか返れたかの印象、が、それも一時的なものに過ぎなかった。

寝ようか、此儘にして老僧の真似をして暁に達して仕舞はうかと、何か有らうと云つて呉れた押入らしいものを見ながら一寸考へたが、気がついて時計を出して見た。時計の針は三時少し過ぎであることを示してゐた。三時少し過ぎて居るから、三時少し過ぎてゐるのだ。驚くことは何も無いのだが、大器氏は又驚いた。ヂツと時計の文字盤を見詰めたが、遂に時計を引出して、洋燈の下、小机の上に置いた。秒針はチ、チ、チ、チと音を立てた。音がするのだから、音が聞えるのだ。驚くことは何も無いのだが、大器氏は又驚いた。そして何だか知らずにハツと思つた。すると戸外の雨の音はザアツと続いて居た。時計の音は忽ち消えた。眼が見てゐる秒針の動きは止まりはしなかつた。確実な歩調で動いて居た。

何故、一見当り前としか思えない事態に「大器晩成先生」はいちいち「驚いた」のか。「驚くことは何も無い」のに「驚く」ことの意味は何か。それは、山寺に来てからの奇異な体験の積み重ねが、「大器晩成先生」を「不明」が当り前であり、物事の判断が停止し、事態の境界線も融

解して、身辺の物・事の輪郭がとめどなくボヤけて見えてくるような領域へと連れ込んだため、「三時少し過ぎてゐる」のにしろ「音がする」のにしろ、通常輪郭の明々確々たる事態が却って不思議の念を以て顧みられるといった逆説的な状況が現出したということだろうと思われる。また、話の展開としては、一貫して世界を包み込む「雨の音」の中、老僧の登場以来、さりげなく聴覚から視覚中心の世界へと移行していることが指摘できる。（しかも、その「視」覚の捉えるものは結末部に明らかなように飽くまで「幻視」的な世界である。）「何となく妙な心持」になって室内を見回す「大器晩成先生」の眼に入ったのは「橋流水不流」と書かれた「煤びた額」であった。

一字づゝ心を留めて読んで見ると、

橋流水不流

とあつた。橋流れて水流れず、橋流れて水流れず、ハテナ。橋流れて水流れず、と口の中で扱ひ、胸の中で咬んで居ると、忽ち昼間渡つた仮そめの橋が洶々と流れる渓川の上に架渡されて居た景色が眼に浮んだ。水はどう〳〵と流れる、橋は心細く架渡されてゐる。橋流れて水流れず、サテ何だか解ら無い。シーンと考へ込んでゐると、忽ち誰だか知らないが、途方も無い大きな声で

橋流れて水流れず

と自分の耳の側で怒鳴りつけた奴が有つて、ガーンとなつた。

フト大器氏は自ら嘲つた。ナンダ、こんな事、とかく此様な変な文句が額なんぞには書いてあるものだ、と放下して仕舞つて、又それから見ると、床の間では無い、一方の七八尺ばかりの広い壁になつてゐるところに、其壁を何程も余さない大きな位な古びた画の軸がピタリと懸つてゐる。

一般的世間的常識や価値観を転倒したような言葉は、新たに「大器晩成先生」の胸中に「不明」の領域を拡大し、「考へ込」んでも「不明」は「不明」のまま、「ナンダ、こんな事」云々と自嘲気味に辛うじて知性が「不明」の解決を放棄、闇の向う側へと押しやった形である。で、いよいよ「大器晩成先生」の「観画」体験。「打見たところはモヤ〳〵と煙つて居るやうなばかり」の画は、よくよく観ると「美はしい大江に臨んだ富麗の都の一部を描いたもの」であった。遠山、丘陵、層塔、高閣、鬱樹、岨、花、谷、

酒楼……等とともに人は、「士女老幼、騎馬の人、閑歩の人、生計にいそしんで居る負販の人、種々雑多の人々が蟻ほどに小さく見えて」いる。

筆はたゞ心持で動いてゐるだけで、勿論其の委曲が画けて居る訳では無いが、それでもおのづからに各人の姿態や心情が想ひ知られる。

「蟻」ほどに小さい人物達から「各人の姿態や心情」まで「想ひ知」る眼を、いつしか「大器晩成先生」は獲得している。更に画面に視線をすべらせて行く先には、画舫、帆走るやや大きい船、漁舟、漁人、宮殿様の建物、民家……と続く。

段々と左へ燈光を移すと、大中小それ〴〵の民家があり、老人や若いものや、蔬菜を荷つてゐるものもあれば、蓋を張らせて威張つて馬に騎つてゐる官人のやうなものもあり、跣足で柳条に魚の鰓を穿つた奴をぶらさげて川から上つて来たらしい漁夫もあり、柳がところ〴〵に翠烟を罩めてゐる美しい道路を、士農工商樵漁、あらゆる階級の人々が右往左往にしてゐる。綺錦の人もあれば、襤褸の人もある、冠りものをしてゐるのもあれば、露頂のものもある。

「春江の景色に併せて描いた風俗画」というひとつの画面に「あらゆる階級の人々」が描かれている。この画面において、人に差別なく、というより、この画面を観入る「大器晩成先生」の心中において人は平等、一切無差別の趣きを呈している。「あらゆる」種類の人々、そこにあるのは確かに差異そのものだろうが、それとて所詮一幅の画中の一存在に過ぎぬという点で、等し並みに観ることができるのだ。「大器晩成先生」のこれまで身につけて来た「学問」こそ、元来が正しく「士農工商樵漁、あらゆる階級」の差別化に貢献するものだった筈だ。今、「大器晩成先生」の観入っている画面自体は、しかし、その「あらゆる階級」をひとつに呑み込んで一幅の「風俗画」として、そこに在る。そこでは、「学問」がはたして幾許の価値を持ち得るのか。

江岸に「一艘の小舟」が揺れながら浮かんでいる。「船頭の老夫」は、片手を挙げて「乗らないか乗らないか」と人を呼んでいる。

膝ツ節も肘もムキ出しになつて居る絆纏みたやうなものを着て、極々小さな笠を冠つて、稍々仰いでゐる様子は何とも云へない無邪気なもので、寒山の拾得か叔

父さんにでも当る者に無学文盲の此男があつたのでは有るまいかと思はれた。オーイツと呼ばはつて船頭さんは大きな口をあいた。晩成先生は莞爾とした。今行くよーツと思はず返辞をしようとした。途端に隙間を漏つて吹込んで来た冷たい風に燈火はゆらめいた。船も船頭も遠くから近くへ飄として来たが、又近くから遠くへ飄として去つた。唯是れ一瞬の事で前後は無かつた。

屋外は雨の音、ザアツ。

画中、焦点化される人物が「船頭の老夫」で、彼が「無邪気」な、「無学文盲」の男であったことについて、もはや多言を要すまい。「無邪気」であること、「無学文盲」であることは、決して恥ずべき忌避すべきことなのではなくて、むしろ歓迎すべき讃仰すべきことでも有り得る、というこれまた逆説的な常識的価値観の転倒。この「船頭の老夫」の呼びかけにこそ「大器晩成先生」が「莞爾」ともし、返辞しようともすることの意味は決して小さくはない。「冷たい風」に「大器晩成先生」の幻覚は破られるが、辿り着くべき所にようやく「大器晩成先生」は辿り着いたのである。

締め括りの一節。

大器晩成先生はこれだけの談を親しい友人に告げた。病気はすべて治つた。が再び学窓に其人は見はれなかつた。山間水涯に姓名を埋めて、平凡人となり了するつもりに料簡をつけたのであらう、或人は某地に其人が日に焦けきつたたゞの農夫となつてゐるのを見たといふことであつた。大器不成なのか、大器既成なのか、そんな事は先生の問題では無くなつたのであらう。

「大器晩成先生」は、奥州のとある山寺での体験を経て、遂に「不明の病気」から解放され、更にはその淵源であったろう「学問」からも自らを解放した。あとはただ、理想的な「平凡人」の「山間水涯」での生活が待っている。「帰学」ならぬ「棄学」の物語はかくして無事成就したのである。

※引用文は初出本文に拠った。

参考文献

北川桃雄「作品の印象Ⅱ　観画談」（『露伴全集』月報　第七号

昭二四・一二）
竹盛天雄「『観画談』」（『解釈と鑑賞』昭五四・九）
川村湊「音は幻」（『海燕』昭五七・二）
瀬里廣明「『観画談』とその背景」（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』昭五七・三）
石倉美智子「『観画談』論」（『露伴小説の諸相』平元・三）
関谷博「『観画談』における恢復―露伴と都市―」（『藤女子大学国文学雑誌』平七・三）
中谷克己「露伴『観画談』の世界―癒しとしての自己像―」（『青須我波良』平八・七）